〔論　文〕

英国エセックス州デザイン・ガイドにおける住宅デザインの起源

満岡　誠治*

The Origins of Housing Design in the Essex Design Guide, UK

Seiji MITSUOKA

Abstract:

The aim of this study is to clarify the origins of housing design in the Essex Design Guide, UK. The housing design in the guide can be traced back to a hall house which is one of the traditional types of houses in the UK. On the process of developing the housing design, it was influenced by a street-oriented house such as a Georgian town house and by-laws housing in the 19th century. Afterward, the Parker-Morris Space Standards which is published in the guide was created by the British government to control size of house in the middle of the 20th century. Furthermore, the contradiction to high-rise housing and the revaluation of traditional housing technique can be seen on the background of the housing design.

Key words: design guide, housing, hall house, Georgian house, by-laws, Parker-Morris Space Standards, UK

1．はじめに

現在，我が国における都市・地域づくりは，大きな転換の中にある。それは，景観法を含む景観緑三法の成立(平成16年6月)に象徴されるように，美しい街並みや景観の形成の視点から，都市・地域づくりを行おうという動きである。しかし，我が国の一般的な住宅地においては，このような視点から開発が行われなかったため，それをどのように行うべきかという基礎的な手法さえも確立されていない。これに対して現代の英国では，地方自治体の都市計画当局が，独自に作成した非法定のデザイン・ガイドを用いて住宅地開発を規制し，美しい街並みや景観を有する住宅地の形成に成功している事例が確認される。例えば，図1及び図2に示す英国エセックス州の住宅地は，21世紀になって民間企業により開発されたものであるが，エセックス州庁都市計画当局が独自に作成したデザイン・ガイド（エセックス州デザイン・ガイド)[1]を用いて，デザイン・コントロールを行うことによって，あたかも時を経て存在するかのごとき街並みが形成されている。本研究の目的は，このように顕著な成果を上げているエセックス州デザイン・ガイドに着目し，その住宅デザインの起源を考察することである。

2．既往研究と本研究の方法

本研究に先立ち，筆者はエセックス州デザイン・ガイドを対象とした複数の研究論文を発表している。まず，満岡(2003)[2]では，同ガイドの理念と方法を考察し，1980年代後半の景観論争を契機として，同ガイドが良好な景観の形成とともに環境，機能，認知という分野にまたがる総合的な街づくりを志向するものへと発展したことを明らかにしている。続いて，満岡 (2004)[3]では，同ガイドが提示する街区構成を考察し，浸透性 permeability や読解性 legibility といったコンセプトの出現を契機として，それがクルドサックから不整形グリッドへと発展し

*建築・設備工学科
平成18年4月28日受理

図1　エセックス州ボッキングの住宅地開発

図2　エセックス州ブラック・ノットレイの住宅地開発

図3　デザイン・ガイドが示す住宅外観の好ましい事例

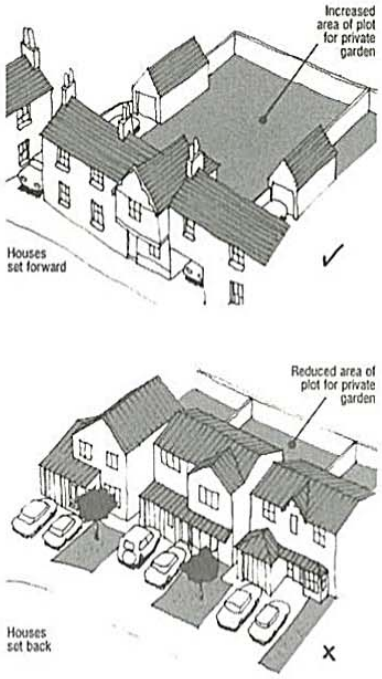

図4　デザイン・ガイドが示す好ましい住宅配置(上)と不適切な住宅配置(下)

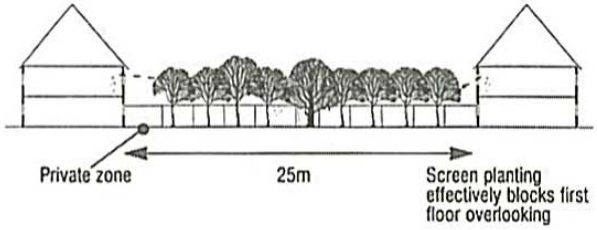

図5　デザイン・ガイドが示す裏庭の奥行き：裏庭側の住宅間距離として25mを確保すること

表1　パーカー・モリス空間基準

A home to be built in the future for occupation by (no. of persons)	6	5	4	3	2	1
should be designed with a **net floor area** of at least:	—	—	—	—	—	—
3 storey house	97.548 *1050*	93.800 *1010*	—	—	—	—
2 storey centre terrace	91.974 *990*	84.541 *910*	74.322 *800*	—	—	—
2 storey semi or end	91.974 *990*	81.755 *880*	71.535 *770*	—	—	—
Maisonette	91.974 *990*	81.755 *880*	71.535 *770*	—	—	—
Flat	86.400 *930*	79.000 *850*	69.700 *750*	56.670 *610*	44.590 *480*	29.730 *320*
Single storey house	83.610 *900*	75.250 *810*	66.890 *720*	56.670 *610*	44.590 *480*	29.730 *320*
General storage as follows; *Houses*	4.645 *50*	4.645 *50*	4.645 *50*	4.180 *45*	3.716 *40*	2.787 *30*
Flats and maisonettes inside the dwelling	1.394 *15*	1.394 *15*	1.394 *15*	1.115 *12*	0.929 *10*	0.734 *8*
Outside the dwelling	1.858 *20*	1.858 *20*	1.858 *20*	1.858 *20*	1.858 *20*	1.858 *20*
	sq. metres *sq. feet*					

たことを明らかにしている。また，満岡（2005）[4] では，同ガイドを含む英国のデザイン・ガイド全体の特徴を考察し，そのルーツが建築設計の手引書であるパターン・ブックであること，さらに，開発許可型と呼ばれる英国の都市計画制度において，法定のマスター・プランを補完するものとして発展してきたことを明らかにしている。本研究は一連の既往研究を継承するものであり，本研究の方法においても，既往研究と同様に歴史的視点を用いて，研究対象（住宅デザイン）の特徴がいかにして形成されたかを考察するものとなっている。

3．エセックス州デザイン・ガイドの住宅計画の特徴

1997年に発行されたエセックス州デザイン・ガイドの最新版における住宅デザインの特徴は，次の三つに集約される。第一に，新規に建設する住宅の外観を，エセックス州の伝統的な住宅をモデルとしてつくるように規定していること（図3），第二に，それらは表庭が無く，裏庭のみを有する街路型住宅となっており，特に，裏庭の奥行きや規模に細かい規定を設けていること（図4，図5），第三に，住宅の内部空間を規定する尺度として，住宅タイプ別及び居住者数（家族数）別に住宅の最小床面積を示している「パーカー・モリス空間基準 Parker Morris Space Standards」を採用しいていることである（表1）。以上，三つの特徴を明らかにするために，エセックス州デザイン・ガイドの住宅デザインの起源にかかわると判断される英国住宅史の概要を通時的に記述する。

4．住宅モデルの起源であるホール・ハウス

エセックス州デザイン・ガイドは，同州に現存する18世紀以前から19世紀にかけて形成された街並みの写真を示し，その街並みに調和するような住宅デザインを求めている（図6）。この事実から，同ガイドが推奨している住宅デザインとは，エセックス州をはじめイングランドの各地で建設され，伝統的な街並みを構成しているホール・ハウスとその発展系を起源とすると考えられる。ホール・ハウスとは，紳士階級の下に位置し土地の保有権を有する農民階級である自由農 Yeoman の住まいである。それにはホールと呼ばれる屋根まで吹き抜けた大きな部屋が存在し，料理や食事から睡眠まで日常生活のあらゆる行為がそこで行われていた。ホール・ハウスは7世紀頃から使用され始め，貧しい地域では17世紀まで使われていた[5]。その平面型に着目するならば，それはもともと一室のホールからなる住宅だったので[6]，13世紀以

図6　エセックス州デザイン・ガイドが掲載する同州内にある18世紀以前に形成された街並み

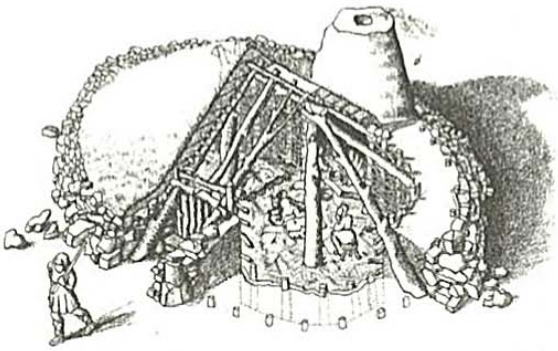

図7　一室型住宅：13世紀以前の庶民住宅

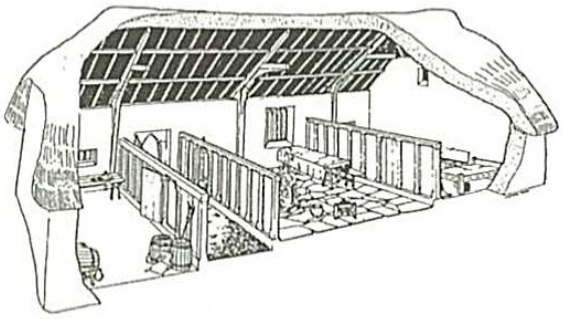

図8　ロング・ハウス：その平面型は一室型住宅とホール・ハウスとの中間に位置すると考えられる。

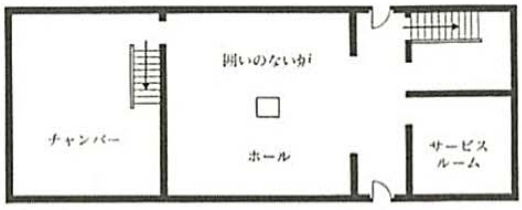

図9　ホール・ハウスの平面の一例

前に庶民によって使用されていた一室型住宅が（図7），複数のコーナーからなるロング・ハウス[7]へと発展し（図8），ホール・ハウスとして完成したものだと考えられる。ホール・ハウスは，後にサービス・ルームとチャンバーが付け加えられて，ホール，チャンバー，サービス・ルームという三つのゾーンから構成される住宅として一般化した(図9)。このうち，チャンバーとは私室として使われた部屋の総称である。また，サービス・ルームとは，家庭生活ではなく農業等の作業のために使われた部屋の総称であり，家畜がそこで飼われることもあった。さらに，これらチャンバーとサービス・ルームの上部には二階が配されることもあった。

このように，ホール・ハウスは三つのゾーンからなる単純な空間構成の住宅であったが，外観的には様々なバリエーションが存在した（図10)。それらに共通するのは，間口が広く，また，奥行きが浅いことである。このようなホール・ハウスが中世の終わりまでに10万から20万戸建てられ，当時の総人口300万人の約3分の1がそれらに住んでいたと推定されている[8]。

Quiney (1995)[9] は，ドーセット州北部のイェットミンスターに現存しスプリング・コテージと呼ばれている民家を事例にして，ホール・ハウスの平面が次のような段階を踏み，二階建てに変化したと述べている[10]。それによると，ホール・ハウスはホール，チャンバー，サービス・ルームという三つのゾーンからなる住宅であったが，最初に，炉が備え付けられていないチャンバーとサービス・ルームの上部に二階が設けられるという変化が起こった。次に，ホールの中央にある炉に煙突が設けられて，ホールの上部にも二階が設けられるようになり，完全な二階建ての住宅に変化した（図11)。17世紀に入り，ホール・ハウスの平面はさらに大きく変化した。それは，ホールの中央にあった煙突が両側壁に移動し，そこに暖炉がとられた結果，ホールの機能がキッチンとパーラーという二つの部屋に分割され，寝室の機能が2階へと移動したことである[11](図12)。キッチンでは調理や日常の食事，団欒等のインフォーマルな行為が行われ，パーラーでは接客，祝儀，葬儀，日曜の午餐等のフォーマルな行為が行われた。Quiney (1995) は，パーラーが当初，最も良い寝室としても使われたと述べているので[12]，それはホールが分割され発生したものとして捉えられるだけではなく，プライベートな空間であるチャンバーが発展したものとしても捉えられる。その後，18世紀の初期になると寝室は全て2階に配されることとなり，パー

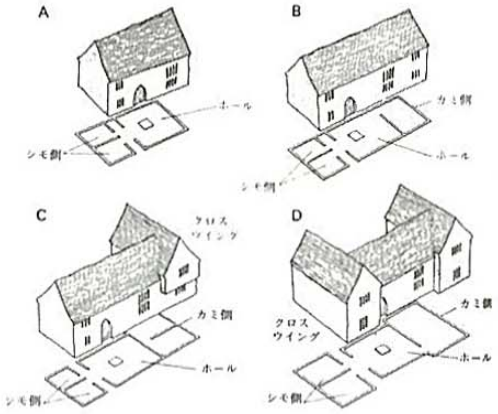

図10　ホール・ハウスの形態的バリエーション

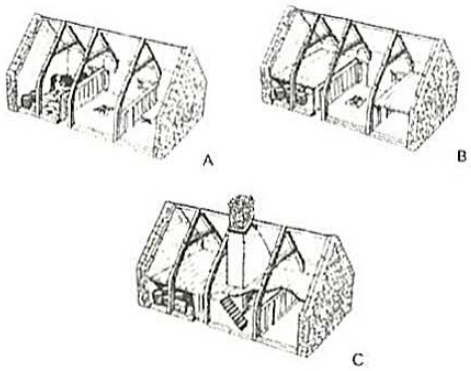

図11　ホール・ハウスの発展の3段階（A→B→C）

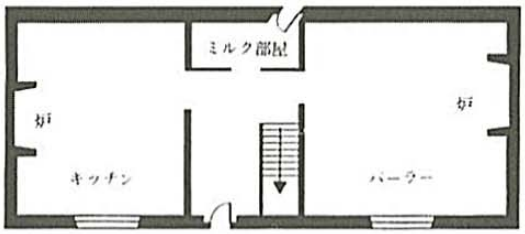

図12　ホール・ハウスの発展系の平面の一例

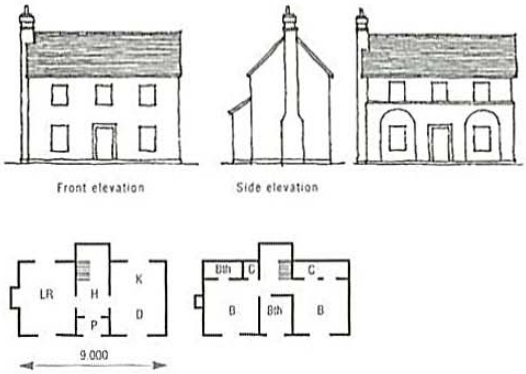

図13　エセックス州デザイン・ガイド掲載の住宅モデルの一例：ホール・ハウスの発展系として捉えられる。

ラーの上部には家長夫婦の寝室が，キッチンやサービス・ルームの上部には他の家族の寝室がとられた[13]。このようなホール・ハウスとその発展系がエセックス州の伝統的な街並みを構成しており，それがエセックス州デザイン・ガイドに採用され，住宅モデルとして扱われているのである(図13)。一方，同ガイドは，外部空間，特に裏庭の広さや奥行きに関する規定を設けているのに対して，ホール・ハウスとその発展系は，裏庭との関係が希薄なものとなっている。次節で述べるように，同ガイドの裏庭に関する規定は，ホール・ハウスではなく街路型住宅の発展の上に成立したと考えられる。

5．街路型住宅の起源

5-1．16世紀のヴァナキュラーな街路型住宅

英国における最初の街路型住宅の事例は，都市部に建てられたヴァナキュラーな町家である。Potter (1996)[14]は，16世紀の都市の商工業者が住む木造の街路型住宅の事例として，1612年に出版されたロンドンの都市計画におさめられている街の一画を再現した図版を紹介している(図14)。そこには，裏庭をともなった五つの住宅が描かれているが，その住宅の一つは，一階にパーラーとキッチンが配されている。これらの室名は，ホール・ハウスの発展系と同じものなので，このようなヴァナキュラーな街路型住宅の起源をホール・ハウスに求めることができると考えられる。しかし，前節で述べたホール・ハウスとその発展系は間口が広く，奥行きが浅いものであるが，この街路型住宅は間口が狭く，奥行きが深いものとなっている。このような特徴は，都市部の過密により，間口の長さが制限を受けて短くなったものと推測される。ここで注目すべきは，ヴァナキュラーな街路型住宅の空間構成が，後述する条例住宅と同じだということである。すなわち，そこでは街路側にパーラーや店舗，工房等のフォーマルな性格の空間が配され，裏庭側にキッチンというインフォーマルな性格の空間が配されている。また，トイレも，条例住宅と同様に後庭内に配されている。したがって，このような空間構成に着目するならば，後述する条例住宅の起源を，このヴァナキュラーな街路型住宅に求めることができると考えられる。

5-2．ジョージ朝タウン・ハウス

英国において都市空間を初めてデザインの対象とした建築家は，王室建築家イニゴ・ジョーンズInigo Jones (1573-1652) である。彼の都市デザインの代表作品は，コヴェント・ガーデンCovent Garden (1630) である。

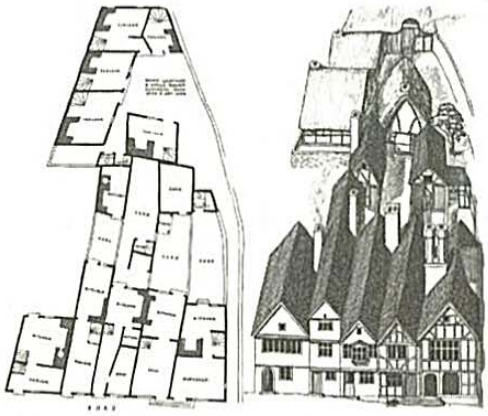

図14　16世紀ロンドンの街路型住宅

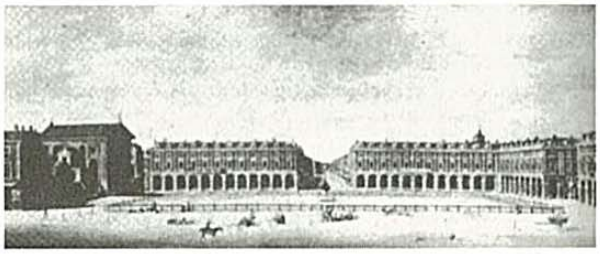

図15　コヴェント・ガーデン (1630—)

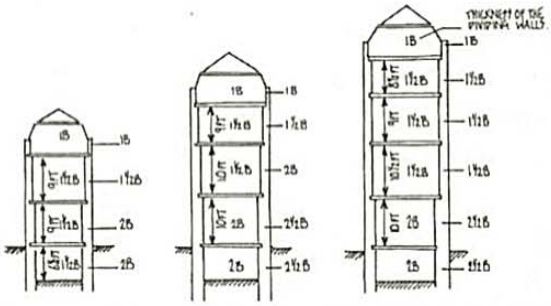

図16　1666年ロンドン大火後の建築規制で規定された3種類の街路型住宅

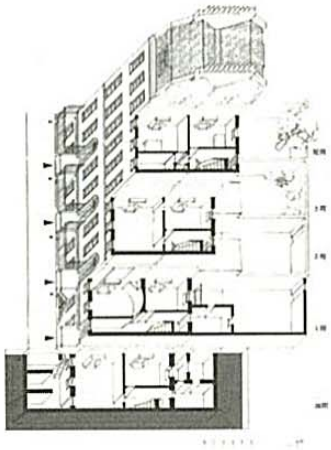

図17　ロンドンのテラス・ハウス

それは1630年にベッドフォード伯爵の所有地につくられたもので，四角形のスクエアと呼ばれる広場を囲んで，西側にセント・ポール寺院を，北側と東側に約18戸の連続した街路型住宅を配置したものであり，南側はベッドフォード伯爵の庭園に向かって開かれていた(図15)。この街路型住宅が，後述するジョージ朝（1714—1830）のタウン・ハウスの原型だと言われている[15]。そこでは，1階にパーラー（客間）と書斎が，主階である2階にダイニング・ルームとドローイング・ルーム（居間）が，3階以上には寝室が配されており，さらに，建物の背後には裏庭がとられ，その端部に馬車の格納庫と馬屋が置かれている[16]。

その後，ジョージ朝(1714—1830)において，タウン・ハウスが数多く建設された。このタウン・ハウスのボリューム及び外観は，1666年のロンドン大火後に強化された建築規制の影響を受けて定型化したものとなっていた。その建築規制とは，建築物の規則性，画一性，優美さの向上を目的として，建築物を，①主要な道路に面する4階建の街路型住宅，②小さな街路に面する3階建の街路型住宅，③路地に面する2階建の街路型住宅，④街路から引き込んで建てられた最大級規模の4階建独立住宅という4種類に分類したものである。特に，このうちの①から③の街路型住宅については，建築物の階高や側壁の厚み，さらにレンガまたは石といったエレベーションの建築材料を規定したものとなっていた（図16)。また，タウン・ハウスは，ボリューム及び外観の定型化に対応して，その平面も定型化していた。一般的に，その地階には厨房と召使の部屋が，1階にはダイニング・ルーム（食堂）とパーラー（客間）または書斎が，主階である2階にはドローイング・ルーム（居間）が，3階や4階には寝室が，屋根裏部屋には物置や召使の部屋が，それぞれ配されている（図17)。タウン・ハウスは，貴族の大邸宅を除き同形の数戸が連続して建設されたが，このように連続して建てられたタウン・ハウスは，テラス・ハウス，またはロウ・ハウスと呼ばれている。これらの連続住宅は投機的な住宅開発として建設されており，最大限の戸数を確保するために各区画の間口は約7mに抑えられている。この結果，各住戸は間口が狭く，奥行きが深いものとなっている。このような特徴を持つテラス・ハウスやロウ・ハウスなどのタウン・ハウスの存在が，次節で紹介する条例住宅の誕生のきっかけとなったと考えられる。

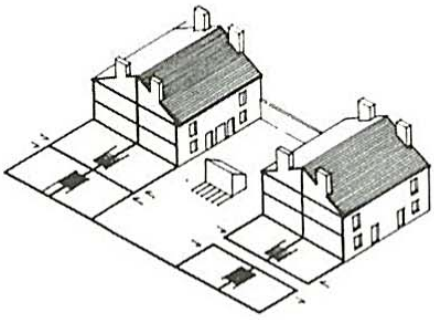

図18　バック・ツー・バック・ハウス

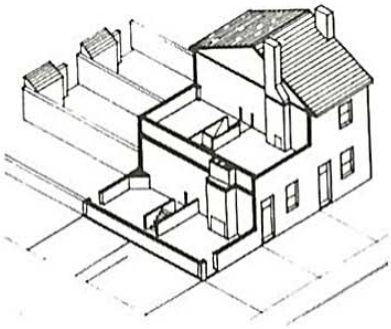

図19　条例住宅

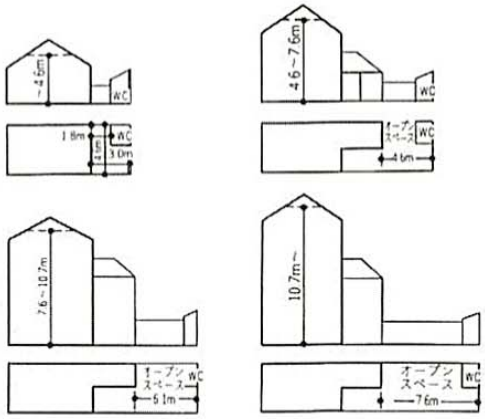

図20　条例住宅の形態を決定した建築高と裏庭の奥行

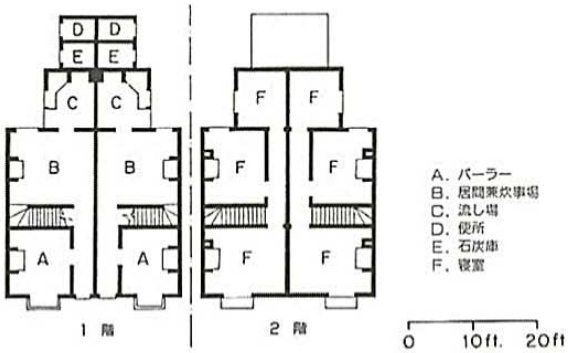

図21　条例住宅の平面の一例

5-3．条例住宅

19世紀以降の工業の発展とともに都市は多くの労働者を求めた。その都市へ「囲い込み」によって農地を追い出された多くの農民が流入した。都市人口の急激な増加は，貧困者が集住し，劣悪な住環境を形成しているスラムを発生させた。スラムでは，各住宅が表裏背中合わせに接着し建てられたバック・ツー・バック・ハウスback-to-back houseが一般的であり，トイレは各戸ではなく中庭にまとめて配置された。また，それには浴室，厨房，食物の貯蔵設備がないものも存在した(図18)。このような都市労働者の劣悪な住環境を改善するために，1848年に最初の公衆衛生法Public Health Actが制定された。同法の下で公衆衛生制度は発達し，1875年の公衆衛生法によって各自治体に衛生担当部局が設けられた。続く1877年に標準条例model by-lawが定められ，これに基づいて各自治体によって建設されたのが条例住宅by-lawsである（図19)。この条例住宅に関して西山(1992)[17]は，標準条例は100項目にもわたるが，条例住宅の空間構成を決定したのは，①道路幅員，②裏庭の面積及び奥行の二項目であると述べている[18](図20)。このうち①は，自動車が通る道路の最小幅員を11m（36 feet）とし，それ以外の道路の最小幅員を7.3m (24 feet) と規定したものである。②は，建築物の高さによって裏庭の最小面積と最小奥行きを定めたものである。ここで注意したいのは，エセックス州デザイン・ガイドにおいても，②と同様に，裏庭の最小面積と最小奥行き（但し，同ガイドでは，裏庭側の住宅間の距離となっている）が規定されていることである。したがって，同ガイドの住宅計画における裏庭デザインの起源を，この条例住宅に求めることができると考えられる。

条例住宅は，19世紀末の15年間に英国のほとんどの都市周辺部に建設された。条例住宅の表庭については規定が無かったためか，表庭のある事例と無い事例の両方を見ることができる。一方，条例住宅の平面はほとんど同じであり定型化したものとなっている(図21)。1階では前面道路側にパーラー（客間）というフォーマルな空間が，裏庭側にキッチン（居間兼台所）というインフォーマルな空間が配されている。また，2階には二つから三つの寝室が配されている。Potter (1984) は条例住宅の問題点として，第一に，それが土地の傾斜や眺望や特徴を無視して全国一律に規格化され建設されたこと，第二に，その裏庭は薄暗い上に隣家から丸見えであり非常に見苦しい空間となっていること(図22)，の二点を指摘している[19]。これらは，エセックス州デザイン・ガイドが指摘している「どこにでもあるような住宅anywhere type houses」，「荒れ果てた裏庭cramped back garden」という20世紀の郊外型住宅地開発における問題点と全く同じものである[20]。この点を考慮するならば，エセックス州デザイン・ガイドの住宅計画とは，住宅の単体レベルにおいては条例住宅の配置形式を踏まえながらも，住宅の集合レベルにおいては条例住宅の持つ問題点を克服したものであると理解される。

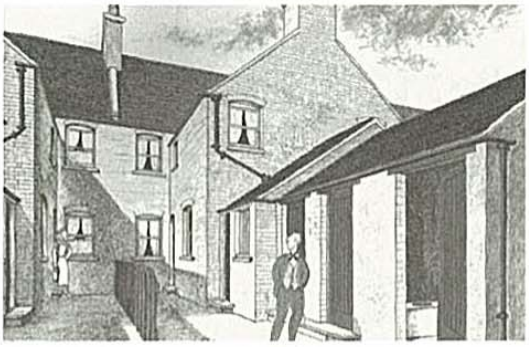

図22　条例住宅の裏庭：隣家から丸見えとなっている

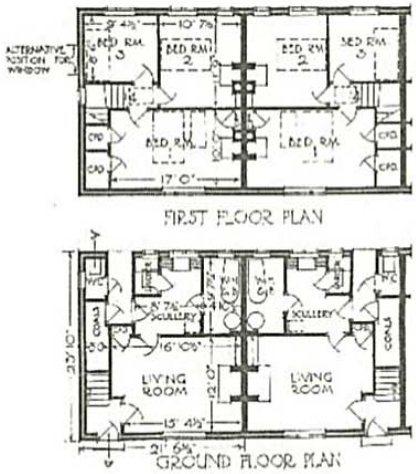

図23　1919年マニュアルが掲載する住宅平面の一例

6．政策による住宅平面の改良

6-1．チューダー・ウォルターズ報告書

チューダー・ウォルターズ報告書は，英国政府の住宅政策の基本方針の策定を任務としたチューダー・ウォルターズ委員会のレポートとして，1918年に発行されたものである。それは住宅内部，特に住宅平面に深く言及している。具体的には，住宅の最小床面積を855平方フィート（約79.4m²）と規定するとともに，各住宅の1階には，リビング・ルーム，パーラー，流し場sculleryの3部屋

が最低限必要なこと，また，2階には，寝室として3部屋が最低限必要なことを明記している。特に，2階に関しては，その3部屋のうちの1部屋にベッドが二つ置かれる広さを確保するとともに，10歳以上の男女を同室で就寝させないという家庭内の就寝分離を徹底させるべきことを表明している。このように，同報告書はそれまで慣習的につくられていた住宅の平面に理論的な根拠を与えたものとなっている。同報告書を出発点として，英国の住宅計画が理論レベル及び政策レベルにおいて発展していったと理解される。

同報告書の内容は，1919年に「政府の援助する住宅計画の準備マニュアル」(Manual on the Preparation of State-Aided Housing Schemes, 1919)[21] として編集され，公営住宅のためのデザイン・マニュアルとして活用された(図23)。これに関してLawrence (1992)[22] は，1919年に制定された住宅及び都市計画法（別名：アディソン法）により，各地方公共団体にはスラム・クリアランスを行うとともに労働者階級を対象とした住宅地の整備を行うことが義務付けられたが，その際，設計の参考とされたのは建築家レイモンド・アンウィンらによって設計されたハムステッド田園郊外やこの「政府の援助する住宅計画の準備マニュアル」であったと述べている[23]。

6-2．パーカー・モリス報告書

英国政府は1918年のチューダー・ウォルターズ報告書に引き続いて，1944年に住宅政策の基本方針を示したダドレー報告書（正式名称「住居のデザインDesign of dwellings」）を発表した。このダドレー報告書は，カップル向けの高層住宅，ファミリー向けのメゾネットやテラス・ハウス，高齢者向けの低層住宅等の様々な規模や形態の住宅を混合して整備するという混合開発mixed developmentの考え方を提案するとともに，住宅の最小限面積を，各部屋の最小限面積の総和に基づいて算出することを推奨した(表2)。このうち，混合開発の考え方は支持されたものの，各部屋の最小限面積の総和に基づいて住宅の最小限面積を求めることは，この後に発行された政府の報告書において訂正されることとなった。1961年，英国政府はダドレー報告書に代わる新たな住宅政策の指針を発表した。それが，パーカー・モリス報告書(正式名称「今日と明日のための住居Homes for today & tomorrow」）であり，同報告書の中で提案されたのが，パーカー・モリス空間基準である。

パーカー・モリス空間基準とは，居住者数（家族数）に対応する住宅の最小限面積を，3階建て住宅，2階建てテラス・ハウス，2階建て独立住宅，メゾネット，フラット，平屋建て住宅という6種類の住宅タイプ別に基準として表したものである(表1)。同報告書は，住宅の最小限の床面積とともに，家族が集える部屋，プライバシーや静けさが確保された部屋，設備が整い食事もできるようなキッチン，満足のいく動線，余裕のある倉庫が必要であるという住宅デザインの基本方針を表明しているが[24]，住宅の具体的な平面の事例は示しておらず，パーカー・モリス空間基準によって，住宅の最小限面積を提示しているのみである。この理由について同報告書は，「我々はこのアプローチを，住宅計画に関する建築家のクリエイティブなエネルギーを喚起する大変重要な方法だと考える」[25]と述べており，住宅平面の事例を示さないことが建築家の創造力を活性化し，結果的には良い住宅がデザインされることになるという考えを明らかにしている。この背景には，中産階級のみならず労働者階級の住宅においても，1階に居間と食堂と台所，2階に3つの寝室をそれぞれ設置するという住宅計画の考え方が，浸透したことによると推測される。

表2　ダドレー報告書が規定する各部屋の最小限面積

一番良い寝室	135
第二寝室	110
シングルの寝室	70
食事をしない居間	160
食事をする居間	210
食事をする台所	110
調理だけをする台所	100

（単位：平方フィート）

7．高層住宅の否定と伝統的な住宅の再評価

エセックス州デザイン・ガイドに掲載されている住宅は，ヴァナキュラーな外観を持つ，2階建てまたは3階建ての低層住宅となっているが，そのデザインは，ル・コルビュジェをはじめとするモダニズムの建築家によって提唱され，主として第二次大戦後に実現化された高層住宅の対極に位置するものである。エセックス州デザイン・ガイドは，直接的に高層住宅のデザインを否定してはいないが，1970年代初頭の同ガイドの誕生の時期と重なって高層住宅の否定が始まった事実を考慮するならば，同ガイドの住宅デザインの背景に，高層住宅の否定と伝統的な住宅の再評価が存在すると考えられる。

英国における高層住宅に関して注意すべきは，それが我が国のように容積率を増加させる手段として用いられ

ているのではなく，地上レベルのオープン・スペースを増加させる手段として用いられている事実である。つまり，英国においては条例住宅，街路型住宅，高層住宅等のどの住宅形式をとっても，同一敷地における総住宅戸数は基本的には同じだと捉えられているのである（図24）。

高層住宅の考え方の特徴を最も良く表しているのは，1930年のル・コルビュジェの「輝く都市」の計画案である。ロウ(1992)[26]は，「輝く都市」をはじめとする高層住宅を用いた近代都市の計画案とは，最終的に地上レベルの自然環境の再建を目指す（と期待される）ものであったと述べている[27](図25)。このようなル・コルビュジェの計画案に代表される高層住宅の考え方は，第二次大戦後の英国においても大いに受け入れられ，それに基づいて多くの高層住宅が建設された。例えば，バーミンガムでは420棟を超える数の高層住宅が，また，マンチェスターやグラスゴーにおいても同様の規模の高層住宅がそれぞれ建設されている[28]。

しかし，英国では次第に高層住宅が敬遠されるようになった。なぜなら，人間のスケールを逸脱し，人目の届きにくいものとなっている高層住宅の共有空間が犯罪の温床となるといった問題や，高層住宅に住む母子が孤独を感じ，情緒的に不安定になるという問題，さらに，幼児がバルコニーから落下するという物理的な問題が指摘されはじめたからである。1968年に発生したロンドン東部のカニング・タウンにおけるローナン・ポイント集合住宅のガス爆発をきっかけとして，英国の世論における高層住宅の否定は決定的となった。この事故により，23階建ての住宅側面が剝ぎ取られ，5人が死亡し，17人が負傷した。Morris (1997)[29]は，人々はこの事故によって最新の建築技術の弱さを痛感し，普遍的な，さらには伝統的な建築技術を再評価し始めたと述べている[30]。エセックス州デザイン・ガイドの誕生は1973年であるが，それはこの事故の5年後のことであり，同ガイドが規定する住宅デザインの誕生の背景に，高層住宅の否定と伝統的な建築技術への再評価が存在すると考えられる。

8．まとめ

英国の代表的なデザイン・ガイドであるエセックス州デザイン・ガイドにおける住宅デザインのモデルは，英国の伝統的な住宅であるホール・ハウスの発展系であると考えられる。しかし，同ガイドが規定する住宅デザインは街路型であること，特に，住宅の裏庭の奥行きや規模に細かい規定を設けていることは，ジョージ朝タウン・ハウスから19世紀の条例住宅に至る街路型住宅の伝統の上に成立したと解釈される。さらに，住宅の平面型に関しては，20世紀初頭より，英国政府の政策レベルでの住宅改良の試みが存在し，その系譜上に，住宅のタイプ別及び居住者数（家族数）別に住宅の最小限床面積を規定したパーカー・モリス空間基準が成立しており，この基準が同ガイドによって採用されているという事実が確認される。また，同ガイドの住宅デザインの誕生の背景には，近代的な高層住宅の否定と伝統的な建築技術への再評価が存在すると推測される。

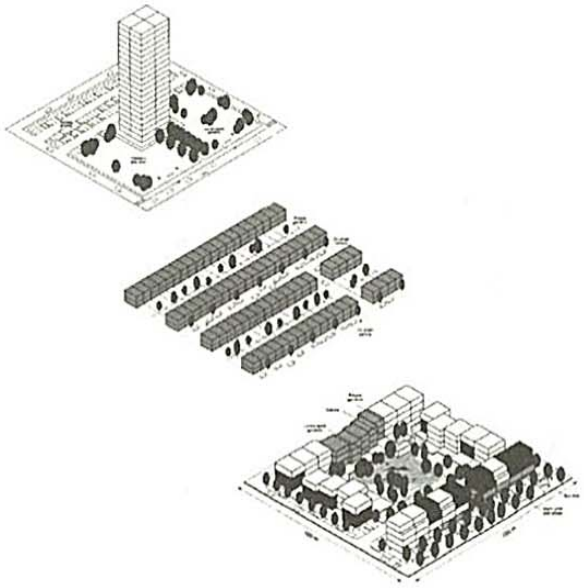

図24　同一住戸数での高層住宅，条例住宅，中庭のある街路型住宅：英国では，どの住宅形式においても住戸密度は同じだと考えられている。

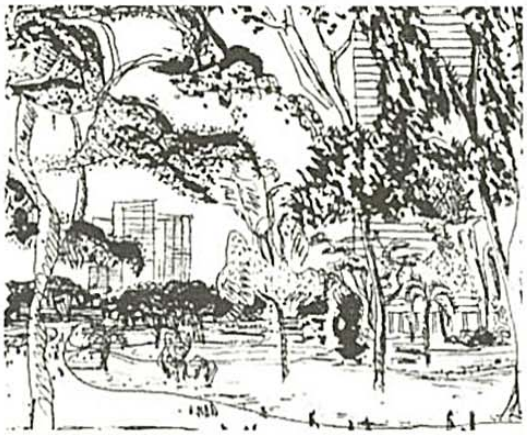

図25　ル・コルビュジェの「輝く都市」：高層住宅は，地上レベルの自然環境を再建するものと期待されていた。

参考文献

[1] County Council of Essex: *A Design Guide for Residential Areas*, County Council of Essex, 1973, 1975 (2nd ed.), 1983 (3rd ed.)

[2] County Council of Essex: *A Design Guide for Residential Areas Highway Standards,* County Council of Essex, 1980

[3] Essex Planning Officers Association: *The Essex Design Guide for Residential and Mixed Use Areas,* Essex County Council and Essex Planning Officers Association, 1997

[4] アンソニー・クワイニー著，花里俊廣訳：ハウスの歴史・ホームの物語（上・下），住まいの図書館出版局，1995

[5] マーガレット・ポーター，アレクサンダー・ポーター著，宮内悊訳：絵でみるイギリス人の住まい，相模書房，1984

[6] 片木篤：イギリスの郊外住宅，住まいの図書館出版局，1987，1991（第3版）

[7] 鈴木博之監修：ブリティッシュ・スタイル170年，西部美術館，1987

[8] 香山寿夫：都市を造る住居　イギリス・アメリカのタウンハウス，丸善，1990

[9] Lawrence, Roderick J.著，鈴木成文監訳：ヨーロッパの住居計画理論，丸善，1992

[10] 西山康雄：アンウィンの住宅地計画を読む，彰国社，1992

[11] レオナルド・ベネーヴォロ著，佐野敬彦，林寛治訳：図説・都市の世界史－4，相模書房，1983

[12] イアン・コフーン，ピーター・フォーセット著，湯川利和監訳：ハウジング・デザイン　理論と実践，鹿島出版会，1994

[13] イアン・カフーン著，服部岑生監訳，鈴木雅之著訳：イギリス集合住宅の20世紀，鹿島出版会，2000

[14] Local Government Board: *Manual on the Preparation of State-Aided Housing Schemes,* H.M.S.O, 1919

[15] Ministry of Housing and Local Government: *Homes for today and tomorrow,* H.M.S.O, 1961

[16] Urban Task Force (Department of the Environment, Transport, the Regions): *Towards an Urban Renaissance,* E & FN Spon, 1999

[17] C. ロウ，F. コッター著，渡辺真理訳：コラージュ・シティ，鹿島出版会，1992

[18] Morris, Eleanor Smith.: *British Town Planning and Urban Design,* Addison Wesley Longman Limited, 1997

[19] Robinson, Lydia: *Essex Design Guide a first time report,* The Architects' Journal, 22 September, pp.533-552, 1976

[20] Hagan, Susan: *Essex: Ideas Mature,* The Architects' Journal, 28 March, pp.636-638, 1979

[21] R.W. ブランスキル著，片野博訳：イングランドの民家，井上書院，1985

[22] 大橋竜太：イングランド住宅史，中央公論美術出版，2005

[23] 満岡誠治，竹下輝和：デザイン・ガイドの新たな展開　英国エセックス州デザイン・ガイドの研究(1)，日本建築学会計画系論文集　第567号，pp. 7-14，2003. 5

[24] 満岡誠治，竹下輝和：クルドサックから不整形グリッドへの街区構成原理の発展　英国エセックス州デザイン・ガイドの研究(2)，日本建築学会計画系論文集第577号，pp.25-32，2004. 4

[25] 満岡誠治：英国のデザイン・ガイドの特徴に関する考察，久留米工業大学研究報告　No.28，pp.15-22，2005

図版出展

[図1] 筆者撮影
[図2] 筆者撮影
[図3] 参考文献[3]
[図4] 同上 p.27
[図5] 同上 p.28
[図6] 同上 p. 4
[図7] 参考文献[5]，p.6
[図8] 参考文献[22]，p.53
[図9] 参考文献[4－上]，p.72
[図10] 同上 p.73
[図11] 参考文献[4－上]，p.102
[図12] 参考文献[4－上]，p.117
[図13] 参考文献[3]，p.109
[図14] 参考文献[5]，p.14
[図15] 参考文献[6]，p.21
[図16] 参考文献[7]，p.31

[図17] 参考文献[9], p.94
[図18] 参考文献[5], p.33
[図19] 参考文献[6], p.57
[図20] 参考文献[10], p.26
[図21] 参考文献[8], p.38
但し，図中の日本語は鈴木成文氏の監訳。
[図22] 参考文献[21], p.163
[図23] 参考文献[14], p.55
[図24] 参考文献[16], p.62
[図25] 参考文献[17], p.89

表 出 典

[表 1] 参考文献[3], p.103
[表 2] 参考文献[5], p.37

補　　注

1　初版は参考文献[1], 最新版は参考文献[2]
2　参考文献[23]
3　参考文献[24]
4　参考文献[25]
5　参考文献[4 —上], p.35
6　同上, pp.32-35
7　12世紀末以降からしばしば確認されるイングランドの農家の平面形式。参考文献[22], pp.50-54
8　同上, p.77
9　参考文献[4]
10　参考文献[4 -上], pp.99-105
11　同上, pp.115-116
12　同上, p.116
13　同上
14　参考文献[5]
15　参考文献[6], p.21
16　同上
17　参考文献[10]
18　同上 pp.26-27
19　参考文献[5], pp.32-33
20　参考文献[3], p. 1
21　参考文献[14]
22　参考文献[9]
23　同上, p.143
24　参考文献[15], p. 2
25　同上, p. 5
26　参考文献[17]
27　同上, p.89
28　参考文献[18], p.146
29　参考文献[18]
30　同上, p.149